
突然訪れた非現実

RS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然訪れた非現実

【Nコード】

N4178G

【作者名】

RS

【あらすじ】

ごく普通の、どこにでもいるような高校生が何と美少女に！？主人公を襲う様々な出来事、最後には何が待ち受けているのか？

プロローグ

「お兄ちゃん、起きてよ〜」

目を開けると、妹の秋穂が俺の顔を覗き込んでいる。

「早く起きないと遅刻するよ〜」

と言いながら俺の体をベットから引きずり降ろそうとしている。

「あーわかったから引つ張るな。」

「朝ごはん出来てるから早く降りてきてね。」

秋穂は俺の部屋から出て行った。

下に降りるとテーブルの上には料理が乗っていた。いつもの平和な朝だ。

おっと、ここで自己紹介しておく。

俺は宮沢優。浜崎市の浜崎高校に通う高校2年生。妹の秋穂も同じ学校に通っている。同じ高2。家には俺と妹の秋穂と2人暮らしだ。両親は海外で仕事をしているから、家にはめったに帰ってこない。

自己紹介はこの辺で。

朝ごはんを食べ終わると、時間の余裕がなくなってきたので、急いで家を出た。

「待ってよお兄ちゃん!!!!!!」

後ろから秋穂が追ってくる。家から学校までは歩いて10分と近い。遅刻ギリギリで教室に滑り込む。後ろにはいつの間にか追いついた秋穂もいた。

「おつす、優、秋穂。」

「おはよう、準」

「おはよう、準君。」

幼馴染の神崎準が挨拶してきた。準とは小学校からずっと同じクラスだ。これはある意味奇跡だと思う。

「おーい、みんな席に着けー」

担任の高岡先生が入ってきた。今日は入学式なので昼までで終わる。クラスのみんなは午後遊びに行かないかなどと話している。

「今日は、入学式で昼までで授業がない。連絡は以上だ。みんなとつと廊下に並べ。」

先生は手短に連絡を済ませると、みんなを廊下に並ばせた。

入学式が終わり、下校の時間になった。

「お兄ちゃん、帰ろうか。」

「ああ。準、帰るぞ。」

俺はまだ友達としゃべっている準に言った。

「俺はこいつらと今から遊びに行くからおまえら2人で帰ってていいぞ。」

「わかったよ。秋穂、帰るか。」

「うん。」

家に着くとのが渴いたので冷蔵庫を開けた。

「なんだ、ジュースはないのか…ん？奥にあったか。」

俺は奥にあった赤い色のジュースをがぶ飲みした。

「なんか…あまりうまくないな。まあいいか。」

秋穂は夕飯の買い物をしに行ってるから家には俺しかない。俺はゲームをしたりして時間を潰していた。

「ただいまー!!」

秋穂が買い物から帰ってきたみたいだ。俺はゲームも飽きて、特にすることがなかったので風呂に入ることにした。

風呂からあがると、ちょうど夕飯ができていた。俺はご飯を食べると強い眠気に襲われたので、自分の部屋に入っすぐに眠った。

次の日、朝早くに目が覚めた。すると、自分の体がやけに軽いことに気がついた。

なんか体が軽いし、胸が重いような気が…
体を起こすと、自分の胸に2つの山があった。しかも、起きあがったときにサラサラしたもの
が視界に入ってきた。

俺は部屋にあった鏡で自分の姿を映した。すると、鏡には息を呑むほどの美少女がいた。

その子に向かって手を伸ばすと、鏡の向こうの美少女も手を伸ばした。

「まさかこれって、俺なのか？」

自分の声よりも明らかに高い凛とした声が自分の口から出た。

そして、ようやく今の状況を理解すると、可憐な声で絶叫した。

「ええ——!!!」

第1話

「お兄ちゃん、起きてるのー？」

下から秋穂が階段をのぼる足音が聞こえてきた。

俺はとっさにベッドの中にもぐりこんだ。

ガチャッ

「あれ、お兄ちゃん寝てるの？おかしいな。確かに声がしたはずなんだけど。」

秋穂がベッドに近づいてくる。

バサッ

毛布をはぎ取った。ついに見つかってしまった。秋穂はしばらく茫然と立ち尽くしていた。

いくら年頃とはいえあまりモテない兄の部屋にあり得ないほどの美少女が兄の服をきてベッドで寝ていたらだれでもこんな反応をするだろう。

「あ、あの…これは、そのお」

勇気を振りしぼって話しかけたが、すぐに秋穂の言葉に遮られてしまった。

「ごめんなさいっっ勝手に人の部屋にはいつちやいけないです

よね。まさかこんなかわいい人がいるとは思わずに、すみせんつ
っ

急いで出て行こうとする秋穂を呼びとめた。

「あ、待って」

「な、何ででしょうか？」

「秋穂、信じられないかもしれないけど、俺は優だ。なぜだかわからないけど、女になっちまったみたいなんだ。」

「お兄ちゃん？ウソでしょ？」

「いや、本当なんだ。証拠ならあるよ。秋穂がまだ小さい時だった。あのおきのお前の将来の夢は……」

「ああー！！それ以上言わないで！」

「じゃあ信じる？」

「信じるよ。」

それにしても、案外簡単に信じてもらえたな。あれはそんなに恥ずかしいのか。まあいいか。

などと考えてると

「それにしても、お兄ちゃんのしゃべり方おかしいよ？なんか全然合っていない。」

「合っていないって言われても……」

「やっぱり女言葉で話さないと、こんなにかわいい女の子が“俺”とか言ったら絶対に変だって」

「じゃあどうすればいいのさ」

俺は投げやりな感じで聞いた。

「今から女の子として生活すること。まずは服と下着ね。とりあえず学校には行きましよう。」

「制服ないからいけないんじゃない？」

「私2着持つてるから大丈夫！」

これで俺の学校行きは確定してしまった。

「でも先生にはなんて言うんだ…言うの？」

話している途中で秋穂が睨んできた。きっとこれからもこんな感じで“女の子”にされていくのかとおもうと悲しくなってくる。

下着の付け方も半泣きになりながら教わり、腕をがっちりつかまれて学校へ連れていかれた。スカートというのは実に足がスースーする。しかも視線が痛い。周りの人がみんなこっちを見ているような気がする。

学校へ着くとまず校長室へ行った。浜崎高校の校長は神崎雄一郎という。準の伯父さんだ。なので小さい頃からよく知っている。だから、校長室の扉を開けるのを躊躇った。しかし、いっしょについてきた秋穂が、思いっきり扉を開けて中に入って行った。もちろん腕をつかまれている俺も引きずり込まれた。これまでのことは秋穂がすべて校長に説明してくれたので、あまり話がこじれずに済んだ。

「いや〜しかし、とてもかわいいな。」

「確かに、かわいいですね。」

担任の高岡先生もいる。

雄一郎おじさんがこちらをじーっと見ている。何かとても嫌な気分だ。

「転校生にするのは少し無理があるから、女子として登録しなさいからそれでいいだろう。」

個人的には全然よくない。

(その体で男を主張したって無理な話だから諦めなさい)

秋穂の目がそんな事を言っているような気がしたので「はい。」と答えるしかなかった。

「じゃあそろそろHRがはじまるから教室に行きなさい。高岡先生、あとをお願いします。」

「わかりました。宮沢、いくぞ。」

「「はい」」

「じゃあ、秋穂は先に教室に入って席に着いとけ。優はここでまっている。」

先生は秋穂を教室に入れて、自分も入って行った。

「みんな席に着けー。今日はちょっとした知らせがある。」

「知らせって何ですか？」

口々にクラスのみんなが疑問を口にする。

「転校生っぽいのがくるぞ。」

ぼいってなんですかその表現。外で聞いててあきれた。これは入りづらい。

「入ってきていいぞ。」

先生がそう言ったので、俺はみんなが待っている教室へと足を踏み入れた。すると、みんなが注目するので顔から火が出るほど恥ずかしかった。

「「かわいい…」」

(うわ、ますます言い出しづらくなってきたぞこの雰囲気)

そう考えているうちに先生が言った。

「自己紹介をしてください。」

はあ…なんか嫌だけれどしょうがないか。秋穂も若干睨んでるし。

「宮沢 優です。えっと、いろいろあつて話すことがたくさんあるんですけどっとりあえず話を聞いて下さいっ」

教室がしーんと静まり返ったとおもったら、クラスメイト全員の「ええー！ー！！」という声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4178g/>

突然訪れた非現実

2011年1月6日14時40分発行